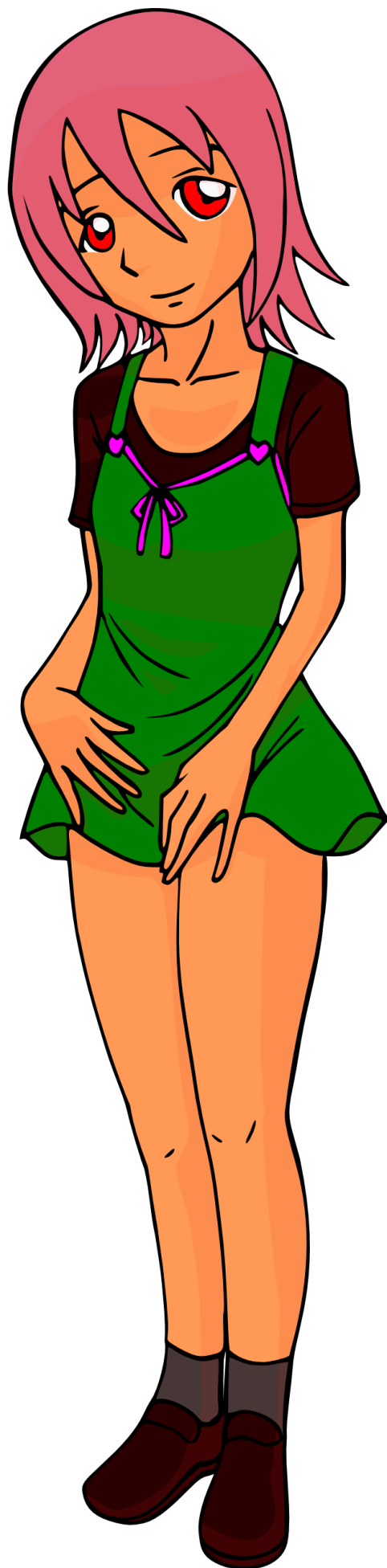


かわいい
後輩が
女装で
告白
して
きたら

二角レンチ

体験版

R-18



先輩は女の子がいいんですよ

目次

後輩ではなく女の子がいた	3
後輩が女装で告白してきた	6
フェラで抜いてもらう	11
原作利用権について	15
プリンタでの印刷方法	17
奥付	18

後輩ではなく女の子がいた

部活の後輩と待ち合わせしていた。俺は時間きっちりに来たのに後輩はまだ来ない。

待ち合わせ場所には女の子がいた。かわいい子だなと思った。だれかを待っているようだった。

彼氏を待っているのかな。うらやましい。俺なんて女の子と一度も待ち合わせなんかしたことがない。

駅前にある広場の、噴水周りは待ち合わせによく使われる。人が多いので、俺と後輩はそこから少し離れた郵便ポストの横で待ち合わせることにしていた。

わざわざここで待ち合わせる人が他にもいたのか。彼女はそばにいて、でも向こうを向いている。だから俺はつい、ちらちらと見てしまった。

すごく短いスカート。足は細くて長い。でもふとももはやわらかそう。

背が低い。髪は短い。でもすそが外へはねていてとてもおしゃれだ。セットに時間がかかるだろうな。男のためにそんなに手間暇かけているのか。そこまでしてもらえる彼氏が心底うらやましい。

そろそろ日差しもきつくなってきた。もう半袖でも汗ばむくらいだ。女の子が薄着になるこの季節。とても目の保養になる。

ああ。俺もこんなかわいい彼女が欲しいな。それにしても、こんなかわいい彼女を待たせるなんてどんな男だ。

俺なら待たせたりしない。絶対大事にする。俺はやることもないせいか、変に妄想を膨らませていた。

うわ、こっち見た。

すごくかわいい大きな目でこっちを見る。ふっくらした唇がやわらかそう。

見ていたのばれたかな。俺はあわてて目を逸らした。

「きゃっ」

彼女の声に、つい振り向いてしまう。彼女は短いスカートを手で押さえていた。風が吹いて、ふわふわしたスカートが広がっていた。

パンツが見えそうで見えない。俺はつい凝視してしまった。

彼女がくすりと笑う。俺は顔に血が上って熱くなる。

「ご、ごめん、でも見えなかったから」

こんなこと言われたらよけい気にする。何も言わないべきだろう。でも俺はすごくあせって、つい口走ってしまった。

彼女がくすくす笑っている。

「いいですよ。気にしないでください」

かわいい声だな。ほっとする。

話しかけてくれた。ここで目を背けたままじゃかえって失礼だ。俺は彼女の顔が見たいのもあってそっちを向いた。

うわ。やっぱりすごくかわいい。

ドキドキする。こんなかわいい子、学校でもいないぞ。

ずっと女の子と縁の無い生活をしていたから、女の子の顔をまともに見たことがない。それがこんなかわいい子だなんて。恥ずかしくてドキドキする。

心臓の音、聞こえやしないだろうな。というか何で俺、こんなに意識しているんだ？

きっと彼女が笑いかけてくれているからだ。こんなかわいい子に笑顔で話しかけられたら、男ならみんな意識してしまうはずだ。

「スカートの中、見たかったですか？」

「え、え、いや、そんな、こと、ありません」

ドギマギしながら答える。この子たぶん年下だよな。でも俺より落ち着いて大人びているようにも思える。やっぱり男とつきあって、恋愛やエッチの経験がたくさんあるからだろうか。

彼氏とやっているのだろうな。くそ。うらやましすぎる。俺も初めてはこんな子としたい。この子としたい。

いけない。こんなこと考えてるってばれないだろうが、顔に出るかもしれない。気をつけないと。

「うふふ。先輩になら、見て欲しいな。見せてあげましょうか？」

「え、え、え、み、見せるって」

彼女は手で押さえているスカートの端をつまむ。そしてゆっくり持ち上げ始めた。

「ほ、本当に？」

からかっているだけだ。でもなんだか、本当に見せてくれるような気がして、俺はつい身を乗り出してのぞき込んだ。

「ぷっ。うふ、くっくっ」

な、なんだ。笑いだしたぞ。

「あはは。先輩必死すぎ。やっぱり童貞って本当なんですね」

女の子が腹を抱えて大笑いする。やっぱりからかわれたんだ。俺って初対面の女の子にからかわれるのか。こんなんだから彼女どころか女友達さえできないんだ。

なんだか変な違和感があった。なんで童貞だってばれたんだ。経験していたら女の子のパンツ見たくならないのだろうか。いや、かわいい子が見せてくれるって言われたら見るだろう。

いや違う、違和感はそこじゃない。さっきから引っかかっていた、魚の小骨がのどに刺さったようなもどかしさの原因がようやくわかった。

「ね、ねえ、君、どうして俺のこと先輩って言うの？」

こんな子に見覚えは無い。今の部活は男だけだし。今までの部活の中でこんな女の子はいなかった。いたら絶対覚えている。こんなかわいい子に部活で先輩なんて言われたら、それだけで夜オカズにしてしまうくらいだ。

「まだわかりませんか？」

「え、ええと、どこかで会ったことある？」

なんだろう。部活以外で先輩後輩の関係なんて俺には無かった。同じ学校だとしても、赤の他人を先輩なんて呼ばないだろう。

「これならわかります？」

彼女はぐっと顔を近づけてくる。顔が近い。大きな目で俺を見つめてくる。

くらくらする。いい匂いがする。女の子って甘い匂いがするんだな。食べちゃいたい。うう。やばい。こんなの嗅いだら、勃起してしまう。

「わ、わわわわかりません」

俺はあわてて顔を背けた。

「本当にわからないんだあ。よかった」

彼女は何だかとてもうれしそうだった。

「それって僕のこと、本当の女の子に見えたってことですよ、先輩」

「女の子に見えたって、君、女の子だろ。だってそんなにかわいいし」

「あは。うれしい。先輩がかわいいって言ってくれた」

女の子は手を組んで身をよじりながらはしゃいでいる。仕草も表情もすごくかわいい。

「よかったあ。これで大丈夫ですね」

「だ、大丈夫って何が」

「先輩、女の子好きでしょ。だから僕、先輩のために女の子の格好してきたんですよ」

「お、女は好きだけど、えと、言ってる意味がまるでわからないんだけど」

「もう。僕ですよ僕。顔見てもわからないなんて。うれしいんだかひどいんだか。女の子の声作ってるからわからないですか？　じゃあ、これならどうですか」

かわいく高い声が少し低くなる。いつも学校で聞いている、部活で聞いている、俺を先輩と呼んで慕ってくる、男の子の声。

「お、お前、お前、え、え、え、えええ？」

「やっとわかってくれました？　僕ですよ。もう。待ち合わせ場所に先に着いていたのに気づいてくれないなんて、ひどいですよ」

とてもそうは見えないが、たしかにここで待ち合わせていた部活の後輩だった。

後輩が女装で告白してきた

「な、あ、でも、うそだろ」

目の前にいる女の子。短いスカートで、俺より背が低くて、かわいい服を着て、かわいい顔をしている。

これが男。それもよく知っている、部活の後輩だなんて。信じられない。いくら見ても女にしか見えない。

さっきまでの甘い声にドキドキした。あれは完全に女の子の声だ。わかる人が聞けば区別がつくのかも知れないが、俺には女の声にしか聞こえなかった。

「先輩」

さっきは男の声に戻っていたのに。また女の声になった。

「さっき僕のことかわいって言ってくれましたよね。僕のこと女の子と見てくれているんですよね」

「う、て、ていうか、女の子にしか、見えないんだけど」

「うれしい。先輩女の子好きでしょ。で、僕は女の子に見える。なら問題無いですよ」

「な、何が」

ちょっと考えればわかるのだろう。でも頭が余りに混乱していて、次の言葉を予想できなかった。だから心構えが出来ず、俺は激しい衝撃を受けた。

「先輩、好きです。ずっと好きでした。僕と、つきあってください。僕を、先輩の彼女にしてください」

かわいい女の子が、顔を真っ赤にして、手を胸の前で組んで、上目遣いで、でもちょっと泣きそうに目をうるませながら、告白してきた。

心臓が、本当に止まったかもしれない。

何も考えられず、まったく動けず、まるで大岩に一瞬でつぶされたみたいだった。俺は死んでしまったのだろうか。

そんなわけもなく、息が苦しくなって吐き出した。そのとたん、俺のすべてが動き出した。ようやく思考が回り始めた。

「えええええと」

俺は考えをまとめるまで、口をもごもごさせた。こんがらがってまとまりそうにない。

「いいですよ。さっきスカートの中見たがったじゃないですか」

「い、いや、あれは、女の子だと、思ったから」

「女の子なら誰でもいいんだあ。じゃあ、女の子に見える僕でも問題無いですよ」

「いや、それは、違う、ぞ」

「僕、先輩の彼女になりたいんです。先輩が彼女できたらしたいと思っていた、どんなことでもしていいですよ」

かわいい女の子にそんなことを言われたら、どんな男でも舞い上がってしまう。ものすごくドキドキする。でも待て。それはあくまで相手が女の子の場合だ。

俺の心は興奮していた。喜んでいた。何でだ。相手はいくら女に見えても男だぞ。

「ほら、部活でいつも話している、エッチなことなんでもしていいんですよ」

部活とは名ばかりで、たんに狭い部室で雑談しているだけだった。部員も数えるほどしかいない。俺の他は同級生が二人。先輩は受験勉強のため、とっくに引退している。後輩なんてこいつ一人しかない。

男ばかり。この歳で、全員童貞だ。だから女とあんなことしたい、こんなことしたいって話ばかりする。携帯でエロい画像や動画を見ながらエロ話ばかりしていた。

おとなしい後輩だった。ちゃんと男だったし、エロい話ものってきた。だからみんなでわいわい騒いで毎日放課後の暇をつぶしていた。

それが女装して、髪型をちょっと変えるだけでこんなにかわくなるなんて。想像もしなかった。そんな女みたいなそぶり一切見せなかったのに。

「僕、先輩にさせてあげるためにいっぱい練習したんですよ」

「れ、練習って」

「女の子の服の着こなしとか、髪型とか、いつもはストレートですけど、ちょっとセットしたらほら、かわいいでしょ」

髪を曲げてちょっと外へはねさせる。なんていうのだろう。テレビで見た、歌もダンスもできるアイドルなんかがしているとてもおしゃれな髪型。

「声、女の子みたいでしょ。コツがあるんですよ。でも随分練習したの」

「話し方はね、僕、でいいですよ。やっぱり私って言うの似合わなくて。ボーイッシュな女の子だと僕って言うほうが似合うんですよ」

ボーイッシュって男そのものだろうが。それはツッコんで欲しいのか。

「いっぱい練習したんですよ。先輩のエッチな要望に応えるために、フェラもお尻もバイブでたくさん練習しちゃいました」

バイブで練習。こいつが、いや彼女がバイブをちゅぱちゅぱ口に含んでいるところや自分でパンツをずらしてお尻にバイブを突き立てているところを想像する。

いい。すごくいい。

「あは。勃起してます？　うれしい」

俺はあわてて股間を手で隠す。

「な、なんだ。勃起してねえじゃねえか」

「あはは。でも想像しましたよね。僕が練習しているところ。エッチ」

かわいい女の子が舌をぺろっと出していたずらっぽく笑う。くそ。なんでそんなにかわいいんだ。

「で、先輩。返事は？」

「は？　何の」

「とぼけないでくださいよ。女の子が勇気を出して告白してるんですよ。ちゃんと返事ください」

ああたしかに。俺の人生で最高の瞬間だった。こんなかわいい子に告白された。それだけでも十分なのに好きなだけエッチしてもいいときた。

男ならこれほどうれしいことはない。こいつが本当に女だったら。くそ。初めて告白されたのに。男だなんて。みじめすぎて泣きそうだ。

「返事はノーだ」

「ええ。そんな言い方ないですよ」

「何言ってるんだ。お前男だろう。男とつきあえるわけないだろ」

「そっちこそ何言ってるんですか。男の僕とつきあってほしいなんて言っていない。僕を女と思って、女として扱ってほしいって言っているんです」

「でもな、お前は男で」

「だから女の格好してるんじゃないですか。女に見えますよね。女にしか見えないって言いましたよね。それは否定できませんよね」

く、くそ。このために、短いスカートはいて、待ち合わせ場所で女のふりしていたのか。女に見えるって言わせるために。

「だからあ、僕を女としてデートして、キスして、エッチしてくれればいいんです。女に見えるんだから大丈夫ですって」

「そんなの無理に決まっているだろう」

「先輩、立ち話もなんですよ、とりあえず行きませんか」

「は？ いやしかし」

「歩きながらでも話はできますって。さ、行きましょう」

後輩は俺の手をきゅっとつかむ。うわ。すごくやわらかい。

手ちっちゃいなあ。やわらかくてきゃしゃで。爪もきれいに切っている。かわいい手だ。思わずぎゅっと握ってしまう。

「うわわ」

「あん」

とっさに手をふりほどく。俺、俺、何握り返してるんだ。

「もう。女の子を乱暴に扱うなんて駄目ですよ」

「ご、ごめん、でも、お前、男だろ」

「今は女の子ですよ。さ、行きましょ。先輩」

後輩は手を後ろに組んでうきうきと歩いて行った。俺はそのあとについていく。

このまま行ってもいいのか。でもあんなふうに先に歩かれたらついていかざるをえない。

なんだがふりまわされている。それだけならまだしもなぜか俺はそれをうれしく思っていた。

やばい。あんな女の顔で、女の服で、女の声で、女の仕草で、しかもかわいい。なんにもかもかわいすぎる。

だからむげにできない。放って帰ったりできない。というか帰っていいか迷う。

いやいや、何を迷うんだ。相手は男だ。つきあうなんてありえない。エッチするなんてありえない。

それでも、あいつが本当に女の子で、服着たままエッチするところを想像してしまった。

製品版ではこのあとデートが続きますが、体験版ではエッチシーンを一部ごらんください。

フェラで抜いてもらう

俺と後輩はしばらく抱き合ったままキスをしていた。腰をすり付けてペニスを気持ちよくしてやる。いったばかりでしんどそうな後輩に、やさしい後戯で余韻に浸らせる。

「ん、先輩、今度は僕が気持ちよくしてあげますね」

後輩はそう言うのと、俺をベッドに寝かせ上にのしかかってくる。

かわいい女の子が、胸をはだけうっとりして俺に跨っている。でもそのめくれあがったスカートからギンギンに反り返ったペニスを露出させている。

なんて奇妙で、卑猥で、たまらない光景だろうか。俺のペニスは興奮でびくびくひくついた。

かわいい顔がキスをしてくる。そして顔中をキスしてまわる。

みみたぶを甘噛みする。そのまま舌で耳をなめまわし、穴に舌を差し込んできた。

「うお」

おどろく。とんでもない快感が耳を刺激する。こんなに気持ちいいのか。知らなかった。

「はあ。む。んちゅ」

かわいい女の子が俺の顔から首をなめまわす。でもこつこつと、硬いペニスでお腹をつついてくる。

胸をさわさわとなでる。そして小さな唇で乳首を摘んでくる。

「うはあ」

ここもすごく気持ちいいぞ。乳首から電気が走る。後輩は俺がしたように片方の乳首をなめながらもう片方を指でいじってくる。

俺の触り方とまるで違う。もっとていねいで、ゆっくりで、やさしく、気持ちよく愛撫してくる。

なんて上手いんだ。俺のために練習したって言っていたな。うれしい。こんなに上手で気持ちよくするには自分を触ってたくさん練習したに違いない。俺のために、そこまで努力してくれたのが、そこまで想われているのが心底うれしくて幸せな気持ちになった。

「あああ。いい。上手い、はあ」

後輩は、俺がほめると気をよくしたのかさらに熱心になめてくる。口に含んだまま舌でこねまわす。一時も離さず執拗になぶる。決して激しくしない。

ゆっくりねっとりなめられるのがもどかしくてじれったい。それが快感をぐいぐい引き出す。たまらない。上手すぎる。

左右の乳首をたくさん愛され、俺の身体は汗だくで火照りきった。「な、なあ。もう、俺」

「もう待てませんか。いいですよ」

後輩はくすりと笑うと愛撫をやめ、俺のペニスに顔を寄せた。

「お口の中に出していいですからね。僕、飲みますから」

後輩はうっとりとしそり勃つペニスを眺める。目が潤んでいる。欲情している。

「バイブでたくさん練習したんですよ。うれしいなあ。やっと先輩にしてあげられる」

かわいい女の子が、竿の根本を握ってくる。きゅっと締めてくるやわらかい手に思わずうめく。

空いている手で玉をもんでくる。包み込むようにやさしく、軽くもみほぐす。

「ずっしり重いです。さっき射精したのにたくさん溜まっていますね。たっぷり出してくださいね」

唇を突き出し、亀頭にキスをする。そのまま頭を下げて唇に埋め込んでいく。

「うあ、すげえ」

熱い口に包み込まれる。粘膜の中に敏感なペニスを入れるのは仰け反るほど気持ちがいい。

「ん、ん、んぶ、んむ」

かわいい女の子が、頭を揺すってフェラをしてくれている。なんてうれしい光景だ。俺のペニスを小さなお口でしゃぶっている。

竿をしごき、玉をもみながら亀頭をしゃぶる。どれもゆっくりと、でも慈しむように丹念に責めてくる。甘いのに強烈な快感が押し寄せては広がる。

「う、は、これ、上手すぎ」

気持ちよすぎる。感じすぎる。とんでもない快感だ。フェラってこんなにいいものなのか。

ベッドの上で上半身を悶えさせる。たまらない。こんなのもうもたない。

「う、悪い、気持ちよすぎて、もうイク」

フェラをはじめてまだ一分もたっていない。でももう限界だった。

後輩が、肉棒をほおばったまま上目遣いで俺を見る。そして目を伏せると一心不乱にしゃぶりはじめた。

「うお、うおお、これ、ううう」

さっきまでのやさしい責めとはうって変わって激しくなった。

竿を強く握ってぐいぐいしごく。でも単調ではない。ひねりをくわえながら巧みにしごき上げてくる。

玉をもみほぐす。痛くないように強くはしない。でも玉をひっぱったりひとつずつ摘んだり、手のひらで転がしたり指を踊らせほぐしたりする。

なんといっても口がすごい。竿の半分までくわえこんでから一気に引き抜く。亀頭から口が離れないようにしてそこから一気に飲み込んでいく。

つばをたっぷり含ませ潤った口内では舌が踊る。ねろぬろぐちよべちよなめまわす。カリ首にぬるりと滑り込ませ鋸で木を切るように何度も往復させる。

ぐぶ、ぐちゅ、ぬちゅ、ぶちゅ、じゅるる、ちゅぽちゅぽ、くぷぷ、ずるん。

吸ったりなめたりしごいたり。せわしく変化しさまざまな快感を与えてくる。

さっき俺がこいつにしてやった下手ななめ方とはまるで違う。巧みで変化に富んで、でたらめなように上手い。快感のつぼをどんどん刺激する。快感が引かない内に違う快感を上乗せしてくる。

やばすぎる。こんなにフェラが上手い奴なんて女でもないんじゃないか。相当練習している。初めてのフェラなのにたまらないほど最高だった。

「うう、は、ああ、出る、うあ」

こんなの何秒も持たない。力をこめてこらえたが、無駄な抵抗だった。

びゅぐるる、ずびゅびゅびゅびゅ。

大量の精液を、熱い口の中に噴出した。

「うはああ。はああぐ、うおお、くうう」

気持ちよすぎる。情けない声が漏れてしまう。男のくせに声が出るなんて。どれだけ気持ちいいんだ。

後輩はじっとして、射精を受け止め続けている。かわいい顔で目を伏せて、口の中に注ぎ込まれている。

射精している間、舌が忙しくなめてくる。見た目はじっとしているのに、口の中はせわしなく責め立てていた。

「う、おふ、うう、く」

力をこめて最後一滴まで絞り出す。出るたびに快感が広がる。こんなの気持ちよすぎる。

「ううう、はあ」

射精を終えて、ちゅぽんと引き抜く。最後まで吸いついて離そうとしない唇は、あまりにも淫猥だった。

後輩は口に手を当てて頭を反らす。喉仏がほとんど目立たないのどを動かし俺の精液を飲み下した。

「んぐ、ん、んんんん」

「おい、苦しそうだぞ。大丈夫か」

「ぷはっ、ん、げほっ」

むせている。俺は身体を起し、その背をなでてあげた。

「ん、かはっ。すいません。こんな大量なの、飲んだの初めてですから」

「無理しないで吐き出してもよかったんだぞ」

「でも、先輩の、飲みたかったから、んぐ、大丈夫です。おいしかったです」

目に涙が浮かんでいる。苦しそうにせきこむ様子からしても相当不味かったのがうかがえる。なのに無理して飲んでくれた。そこまで俺に尽くしてくれることが心からうれしかった。

俺は後輩をぎゅっと抱きしめる。

「好きだ」

「僕も、大好きです」

俺は後輩をそっとベッドに寝かせた。

原作利用権について

原作利用権は、アイデアを原作として利用することができる権利です。

原作として利用するというのは、このアイデアをもとにしてあなた自身のアイデアで改変し、あなたが用意した絵などの素材で作品を作ることです。

漫画、小説、ゲーム、動画、絵本、演劇、映画などあらゆる作品の原作として使用できます。

アイデア以外の絵などの素材を利用することはできません。

例外として文章はアイデアそのものを述べたものであるため、必要に応じて一部あるいは大部分を使用することが出来ます。そっくりそのまま使うのではなく、あなた自身のアイデアで改変して使用してください。

本作品に収録されているすべてのアイデアは原作利用権付きです。

本作品を購入した人は誰でもそれを原作として、自由に改変した上で自分の作品を作ることができます。

体験版など無料で提供したものには原作利用権は付いていません。

原作として使用する際に一切の連絡、許諾、契約はいりません。

原作として使用する際は、原作者名を記載してください。原作、原案、アイデア提供など呼称は何でもかまいません。

原作：二角レンチ

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

原作、原作者および他のあらゆる人、物、団体等に対して貶める、損害や迷惑を与えるなどの行為を禁止します。

原作として使用することにより生じる一切の問題や損失、賠償等に対し原作者は責任を負いません。すべて自己責任で使用してください。

原作者はその原作を用いて作られた作品に対し、利用規定に反しない限り一切関与しません。作品内容に口を出すこともなければ、その作品から得た利益に対し分け前を要求するようなこともありません。

この原作は公開されたものです。そのため、未発表の作品のみを募集する賞などには使えません。

この原作はすべて自分で考えたオリジナルですが、既存の作品と似ていないという保証はありません。アイデアというのは世界中の誰かが同じことを考えているものであり、完全に誰のアイデアとも似ていないアイデアというのは存在しないためです。

原作の著作権を放棄しているわけではありません。この原作を使用して作った作品の著作権はその作成者にありますが、原作の著作権は原作者にあります。

二角レンチが作成、販売している原作利用権付き作品を購入した方は、同時に二角レンチのブログ「ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版」内の全ての作品についても原作利用権を有するものとします。

ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版

<http://stockstackstory.seesaa.net/>

プリンタでの印刷方法

この PDF は印刷して読みやすいようにデザインされています。

1. A 4 コピー用紙を用います。
2. 印刷範囲で「すべて」または「ページ指定」をします。
3. 「両面で印刷」「綴じ方：左」で「小冊子の印刷」をします。
4. 両面印刷で一枚につき 4 ページが印刷されます。
5. 中綴じ用ホチキスなどで綴じます。
6. 二つ折りにすると完成です。

A 5 サイズで手軽に読みやすい文字サイズになっています。

(注：お手持ちのプリンタがこれらの機能に対応している場合に限りです)

印刷

プリンター

名前(N): Canon MG5200 series Printer プロパティ(P) ?

ステータス: 準備完了 注釈とフォーム(M):

種類: Canon MG5200 series Printer 文書と注釈

印刷範囲

☒ すべて(A)

☐ 現在の表示範囲(V)

☐ 現在のページ(U)

☐ ページ指定(G) 1 - 107

印刷指定: 範囲内のすべてのページ

☐ 逆順に印刷(E)

ページ処理

部数(C): 1 ☒ 部単位で印刷(O)

ページの拡大 / 縮小: 小冊子の印刷

小冊子の印刷方法: 両面で印刷

開始ページ 1 終了ページ 27

☐ ページを自動回転 綴じ方: 左

☐ ファイルへ出力(F)

ページ設定(S)... 詳細設定(D) 注釈の一覧(U)

プレビュー: コンポジット

単位: ミリ

1/54 (1)

296.97

209.97

OK キャンセル

奥付

この内容を無断転載、複製して配布するなどの迷惑行為を禁止します。

この内容を閲覧、利用するなどして生じるあらゆる問題、損害等に関してこちらは一切の責任を持ちません。すべて自己責任で行ってください。

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

作品名

かわいい後輩が女装で告白してきたら 体験版

発行日

2011 年 11 月 24 日

著者

二角レンチ

ブログ・連絡先

<http://originalmagazine.seesaa.net/>